

令和5年11月16日

# 南の風 494

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

鈴木 良和氏の考えを続けます。

もちろんトップレベルのチームのように選手のレベルや意識が高ければ、コーチが単純に「うまくなれ」とか「チームに貢献しよう」というだけでも、選手は自分が何をすればチームの役に立つかということがわかるようになります。理想はそういうチームですが、まずは役割を明確にするところから始めることが、責任感を育てる第一歩です。

責任を果たす選手に育てるための実践方法の二つ目は「フィードバック」です。試合のスコアやスタッツなどを記録、分析して、各選手のチームへの貢献度を振り返るのです。フィードバックすることによって、選手のやる気を引き出し、ひいては責任感を強くするという効果が期待できます。

例えば選手に3Pシューターという役割を与えたとします。その選手の試合でのシュート本数と成功率を出して貢献度を明らかにします。同時に分析ができます。シュート本数が少ないのなら、もっと打てるように工夫しなければなりません。成功率が低いのならもっと正確に決められるように努力しなければなりません。やるべきことがはっきりするのです。結果的にその選手は自分が3Pシューターとして成長することに責任を持つことになります。

ただしディフェンスのように貢献度をフィードバックしにくいものは注意が必要です。例えばマンツーマンディフェンスのうまい選手に、エースキラーという役割を与えたとします。その選手はチームの勝利に貢献しようと頑張るでしょう。しかしディフェンスですから、試合が終わってスコアを見てもその選手の貢献度はあまり見えません。成果が分かるとすると、そのチームと何度も試合をしていて、以前はエースに30点取られていたけれど、今回は10点に抑えたというような違いが見られた場合に限られます。初めての対戦だと比較のしようがありません。現実的にはディフェンスはスコアに表れないからフィードバックしにくいという面があります。

しかし専門的に分析していけば、ディフェンスにもディフレクションという貢献度の数値の出し方があります。スティールははっきりと相手のボールを奪った回数ですが、ディフレクションはボールを奪うまではいかなかったけれど、ボールに影響した回数のことです。例えばディフェンスの手に当たったけれど、相手のボールのスローインになったとか、相手のパスが通ってれば失点した場面で、アウトオブバウンズ（コートの外にボールを出すこと）に逃れたといった回数を集計するのです。

ディフェンスに責任を持たせるなら、こういう数値もフィードバックの材料に使うなど、選手たちの努力や責任感に対して、しっかりとフィードバックできる仕組みを作っていく必要があるのです。

責任を果たす選手に育てる方法の3つ目は「継続学習」です。これは選手が成長するにつれて、コーチはレベルに見合った的確な練習メニューや理論を提供し続けなければならないということです。

継続学習の続きは、次号にします。